

障がい者スキーの国際大会 札幌で初開催

3月18日～22日、障がい者ノルディックスキーのワールドカップ「石屋製菓2017IPCノルディックスキーワールドカップ札幌大会」が西岡バイアスロン競技場で開催された。15カ国から選手約80人が参加し、今季のW杯を締めくくった。

競技はクロスカントリースキーとバイアスロン、距離による各2種目ずつ。いずれも「立位」「座位」「視覚障害」の3つのカテゴリーで行われる。

日本からはガイドを含む12選手が参加し、バンクーバーパラリンピック金メダリストの新田佳浩選手が表彰台に上がるなどベテラン勢の活躍に加え、道内出身の新田のんの選手、星澤克選手ら若手も成長を見せた。

国内で障がい者スキーのW杯が開催されるのは、2年前の旭川大会以来2度目となる。大会には多くの市民が応援に訪れ、学生ボランティアなどの協力もあり、各国の選手や関係者からも評価された。

今大会の成功は、障がい者スポーツに対する市民の理解の向上や、その先の冬季オリンピック・パラリンピック招致の実現に近づくことと期待される。しかし、認知度の低さや環境の

整備など課題も多い。

日本代表チームの荒井秀樹監督は、競技指導に加えて選手の発掘やスポンサー探し、講演などの啓発活動を行っている。「企業の力をパラリンピックに生かしてほしい」。荒井監督に、本大会の意義と企業にできることを聞いた。



石屋製菓2017IPCノルディックスキーワールドカップ札幌大会 札幌初開催!

パラリンピックに企業のを!

W杯出場道内選手を応援しよう!

星澤 克選手

(17歳・立命館慶祥高校)
苫小牧市出身。左腕前腕欠損の障がいがある。小学校時代はアイスホッケーなどに取り組み、中学校入学後にノルディックスキーを始めた。



自分の実力を100%出し切れず世界のトップ選手とはまだまだ力の差があると感じましたが、次の大会に向けての課題が見えて得るのが大きい大会でした。

アイスホッケー、野球などほかの競技もやっていましたが、世界で戦えるチャンスを得られる競技はなかなかないので、今後はスキーに全力で取り組んでいきたいです。それと同時に、勉強も一生懸命やっていこうと思います。今後も北海道で競技を続けていきたいと考えているので、道内企業の皆さんにも応援していただけると嬉しいです。

札幌でオリパラが開催されれば、僕らにとってありがたいことですし、今回も改めて応援の力の大きさを感じることができました。選手たちは障がいがあることを悲しむよりも、「失ったものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」というパラリンピックの考えの通り、自分の持っている力を最大限生かそうと頑張っています。一つのスポーツとして見てもらいたいと思います。

例えば、新田のんの選手のシットスキーは今まで関東の企業が作っていましたが、道や北見工大などの協力を得て、今回初めて岩見沢の社会福祉法人「クピド・フェア」が作りました。気象予報の企業の協力では、彼らの確実に天候を読む技術を取り入れて、ノルディックスキーの要であるワックスの調整を行っています。特別なことでなくても、店頭に応援ポスターを貼ったり、ポイントカードの端数を寄付できるようにしたりなど、何でもかまいません。莫大な経費が動くオリリンピックに比べ、パラリンピックは「皆で支えている」という姿が良いところです。まずは競技、選手などいろいろな角度から知っていただきたいと思っています。

各地で講演を行う中で聞いてみると、パラスポーツを生で見たことがある人はほとんどいません。これでは、札幌でのオリパラ開催は難しいでしょう。多くの人が関心を持って、見て、知って、そうした中で実現するものだと思います。札幌招致に向けて、「全国の商工会議所の中で札幌が一番パラ振興に取り組んでいる」と言われるような活動を期待しています。それができてこそ、初めて札幌への招致が近づくとはいえず。

新田のんの選手

(20歳・北翔大学)
札幌市出身。先天性の小児がんのため産まれてすぐに手術し、両脚が不自由。小学3年生から始めた車いすマラソンと並行し、一昨年からノルディックスキーを始めた。



今大会では、初めて平昌パラリンピックの選考基準をクリアし、自己ベストの4位に入ることができうれしい結果になりました。代表は今回のポイントを踏まえて8月の選考会などで決まりますが、今大会で2種類の基準をクリアできたので期待したいと思います。地元での大会は、たくさんの声援が力になりました。実際に見てもらおうことで、競技の迫力やスピード感など感じてもらえると思いますので、これからぜひ生で見たいです。

今回使用したシットスキーは、岩見沢の社会福祉法人に製作していただき、資金はクラウドファンディングで集めました。多くの方の協力で感謝しています。これを機に応援してくれる方が増えたこともうれしいですね。

生まれ育った札幌で冬季オリパラの開催となれば、応援してくれている方にも見える機会になるので、ぜひ出場したいです。まず平昌を目標に、出られたなら上位を目指せるように頑張ります。そして、自分が競技をすることで、子どもたちに「スポーツをやってみよう」と思ってもらえるような選手になりたいです。



- 自社の力をパラリンピックに生かしたい
- 選手の支援をしたい
- パラスポーツをやってみよう子どもたちがいるなど、各種応援・情報提供のご連絡お待ちしております。

お問い合わせ (荒井監督) | 日本障害者スキー連盟
TEL:090-6537-9416
jpnarai@mb.infoweb.ne.jp



日本パラリンピックノルディックスキーチーム

荒井秀樹 監督

旭川市出身。日立ソリューションズ「チームAURORA」監督。1998年長野パラリンピックから障がい者スキーの選手強化、指導、育成を行い、5大会連続でメダリストを輩出。

大会を終えて、たくさんの方にご支援いただいたことを感謝いたします。今年はW杯4大会に加えて世界選手権もありました。今までにない好成绩を収めることができ、来年の平昌パラリンピックに向けて良いスタートを切れたと思います。

札幌はスキージャンプなどのW杯を開催していますが、パラのW杯は今までありませんでした。98年長野パラリンピックのときに50人近くいた道内選手は、ソチのときはわずか2人。冬季スポーツの盛んな札幌で、もつとパラスポーツを広めていく必要があると感じていました。札幌が冬季オリパラを招致すると聞いて、札幌市に今回の大会の誘致を打診して開催に至りました。将来の高齢化社会を考えたとき、パラスポーツの振興はバリアフリーなまちづくりのきっかけになるのでは、と市の幹部にも伝えました。今後大会を継続して開催し、多くの市民にパラスポー

ツの存在を知ってもらえることが重要だと思います。

昨年は札幌の協力のもと、札幌大学で「パラリンピック概論」という授業を行っており、今大会では学生たちがボランティアとして活躍してくれました。彼らが将来、教育や企業の現場に出たとき、障がいのある人と接点を持つことで共生社会の担い手になります。継続して大会を開催し、学生に参加してもらおう。今回は、そんな仕組みづくりの第一歩となりました。札幌にいる多くの障がいのある子どもたちにも、目標を持つてさまざまなことに挑戦するきっかけになってほしいですね。

また、企業の皆さんには、無理なものではなく、長く継続できるような方法で支援をお願いしたいです。企業が持つ力をパラリンピックにどう生かすことができるだろう、と考えていただければ、さまざまな可能性があると思います。